

講演「K-POP の源流」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS70 号に掲載）

2014 年 3 月 28 日

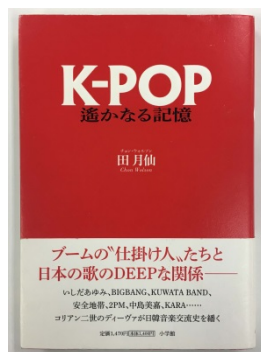
田月仙氏（声楽家・ソプラノ歌手）

在日だからこそ、活動も称賛もダブルに

日本で生まれた私は日韓両国で音楽活動をしています。昨年はデビュー30 周年を迎えまして、記念リサイタルを開くことができました。奇しくも日韓文化交流基金も同じように昨年 30 周年を迎えられましたが、私はそんな節目の年に、日韓文化交流基金賞という賞まで頂きまして、一層忘れられない年になりました。

30 年前の 1983 年、私は東京での連続リサイタル「All about Chon Wolson」でデビューしました。当時は韓国の歌はまったく知られていませんでしたし、それを勉強する場所もありませんでした。私がコンサートのアンコールなどで韓国の曲を披露すると、観客の皆さんは驚いて「韓国にもこんなに素晴らしい曲があるんですね！」と喜んでくださいました。私は田月仙（チョン・ウォルソン）という名前で活動してきましたが、1980 年代当時はまだまだ在日コリアンについてよく知られていませんでしたので、ちょっとさびしい思いもありました。ですが、芸術の世界ではそれが特徴であり、個性になるわけです。何をしても、日本人にはないものがある、そんな褒め言葉をいただきましたし、私もそれを良い方向に考え、ステージでも韓国の曲を披露するように心がけてきました。

1994 年には韓国の「芸術の殿堂」という、当時アジア最大のオペラハウスでビゼーの『カルメン』が上演されることになり、私はカルメン役ではじめて韓国の舞台に立ったのですが、その時今度は、韓国人にはないものがある、と称賛されました。日韓どちらの国でもそういう褒められ方をすることにとまどいつつも、私は得をしていると捉えています。在日ということで嫌なこともずいぶんありましたが、自分はダブルなんだ、と前向きに考えて活動してきました。



K-POP への思いを綴った書籍を 2012 年に刊行

そんな中、1998 年に金大中が大統領に就任し、日本文化開放が始まりました。私は東京都の親善大使として、ソウルではじめて日本の歌を公式に歌うという栄誉を得たのです。

日韓の新しい夜明けにふさわしい曲として、私は『夜明けの歌』を歌うことにしました。ところが当時は日本文化開放が段階的に進んだ時期で、日本の大衆歌謡はまだ開放されておらず、この曲を歌うことは最後まで許可されませんでした。私は大きなショックを受けましたが、この曲にこだわる思いだけは伝えたくて、歌詞を歌わずにメロディだけを歌う、ヴォカリーズという唱法で歌いました。このことは韓国でも大きく報道され、話題になりました。

日本でも受け入れられた韓国の歌

さて、日本における K-POP の源流を考えますと、まずは 1970 年代の『カスマブゲ』を取り上げなくてはなりません。韓国 の歌手、李成愛（イ・ソンエ）がチマチョゴリで歌う姿は非常に印象的でした。在日ではなく、韓国人が歌う韓国の歌に、日本人が拍手喝さいするということはそれまでなかったことだと思います。この歌はカラオケブームのはじまりとともに、日本人にもよく歌われました。次に 1980 年代に入ると、皆さんもよくご存じのチョー・ヨンピルが歌った『釜山港へ帰れ』が大ヒットしました。私が知っているだけでも 50 人以上の日本の歌手がこの曲をカバーしているぐらいですから、ヒットの大きさがよくわかります。ここまでが演歌ですね。この後、BoA が日本デビューを飾ります。ただし、彼女は K-POP ではなく、あくまでも J-POP の歌手としてデビューし、人気を集めました。名実ともに K-POP 歌手として日本にやってきて成功を収めたのは東方神起が最初でしょう。彼らの人気で日本でも K-POP が受け入れられるということがわかってきました。こうして 2010 年、少女時代、KARA といったガールズグループが日本中に K-POP ブームを巻き起こすのです。この時の衝撃はそれは大きなものでした。私はこの現象を日韓両国で直接取材して 90 分の番組として企画、これは『K-POP 青春グラフィティ〜大ブームの仕掛け人たち〜』と題して NHK で放送されました。このなかで私は、若い頃 J-POP を聞いて育ったカリスマプロデューサーたち、そして『ブルー・ライト・ヨコハマ』を知っているという K-POP アイドルたちにも取材しました。

韓国で愛されてきた日本の曲

1910 年の日韓併合以来、韓国では日本の歌が歌われていましたが、独立後は日本の大衆文化の流入が禁止されました。それなのに 1968 年に発売された『ブルー・ライト・ヨコハマ』は韓国で誰もが口ずさむ愛唱歌となりました。アジアで好まれるマイナー のメロディと 16 ビートのリズムが人々の心を捉え、海賊版が飛ぶように売れたのです。日本の歌が禁止されていたにも関わらず大ヒットし、韓国の音楽業界にも大きな影響をもたらしました。日本だけでなく海外文化の流入制限により、画一的な音楽しかなかった韓国において、日本の音楽は人々の耳に新鮮に響いたのです。

2000 年にはじめて韓国でコンサートを開いた安全地帯の歌は K-POP のカリスマプロデューサーたちも好んでよく聞いていたといえます。これももちろん海賊版です。BoA やシ

ン・スンフンの曲を手掛ける音楽プロデューサー、キム・ヒョンソクも日本の音楽に刺激を受けた一人です。「当時の韓国には演歌か若者向けの歌しかなく、その中間の音楽がなかった。そのなかで『ブルー・ライト・ヨコハマ』や『恋人よ』のような日本のバラードはとても新鮮でした」と語ります。2AM、2PM など人気アイドルグループを抱える JYP エンターテインメントの設立者パク・ジニョンも、「当時は日本の音楽が韓国よりずっと進んでいた。今は日本人が K-POP を聴いていますが、将来きっとまたひっくり返って、韓国 人が日本の歌を聴く時代がくると思います。それが繰り返されるのだと思います」と語っています。文化というものは禁止するものではないし、たとえ禁止しても良いものは必ず国境を超えるということがわかります。今は韓国からたくさんの音楽が入って来ています。その前は韓国では禁止されているのに日本の曲が愛されていました。良いものは自然に海を渡り、交流につながっていくのです。

国境を超えた文化の交流時代へ

2010 年の K-POP ブームに至るまで、数多くの韓国人歌手たちが日本の音楽業界に挑戦しましたが、なかなか成功することはできませんでした。そのなかで 1980 年代にアメリカでショービジネスを学んだイ・スマンが、1995 年に SM を立ち上げます。彼はアメリカでの体験を生かし、海外に通用するアイドルを育てようと試みます。彼が育てた H.O.T.は台湾や中国でも人気を獲得し、K-POP のブームが訪れます。でも日本では火が付きませんでした。日本の音楽業界は独特のシステムが完璧に出来上がっていて、入り込む余地がないのです。イ・スマンはそんな日本のシステムを学ぶためにエイベックスと提携し、日本に合ったものを発信することにしました。その上で彼が手がけたのが BoA の日本デビューです。

植民地時代に日本文化が浸透した韓国は、それを消化して固有の文化を新たに築き上げてきました。歌をさかのぼると、複雑な交流があったことが見えてきます。日本でも今ではブームを通して韓国語を勉強したり、韓国に旅行する人が増えています。日本のこうした状況を見て、韓国でも日本の良いものをもっと受け入れていこうという声が上がっています。パク・ジニョンさんがおっしゃるように、相互に受け入れたり与えたりを繰り返しながら絆を深める、それが文化交流の姿だと思います。

(了)